

# 目 次

平成29年 3月14日（火曜日）第2号

○招集年月日	-----	1頁
○招集の場所	-----	1頁
○開議日時	-----	1頁
○応招議員	-----	1頁
○不応招議員	-----	1頁
○出席議員	-----	1頁
○欠席議員	-----	1頁
○地方自治法第121条の規定により説明のため出席した者の職氏名	-----	1頁
○本会議に職務のため出席した者の職氏名	-----	1頁
○議事日程	-----	2頁
○開議宣告	-----	3頁
○一般質問	長崎議員 -----	3頁
	・自治体が養成する防災士を	
	柏倉議員 -----	4頁
	・認知症サポーターの育成を	
	大谷議員 -----	8頁
	・これまでの質問の進捗状況と対応は	
	高森議員 -----	10頁
	・長万部高等学校の将来像は	

## 平成29年第1回長万部町議会定例会（第2日目）

◎招集年月日 平成29年 3月14日（火）

◎招集の場所 長万部町役場 議場

◎開議日時 平成29年 3月14日（火） 午前10時00分

### ◎応招議員（10名）

1番	北川佳嗣	6番	大谷敏弥
2番	長崎厚	7番	村川毅
3番	辻紀樹	8番	角健
4番	高森功治	9番	柏倉恵里子
5番	橋本收司	10番	辻義雄

◎不応招議員 なし

◎出席議員 応招議員に同じ

◎欠席議員 不応招議員に同じ

### ◎地方自治法第121条の規定により説明のため出席した者の職氏名

町長	木幡正志	出納室長	小川洋
副町長	佐々木伸也	消防長	佐藤英代
総務課長	本前武広	病院事務長	田辺知行
まちづくり新幹線課長	加藤慶一	教育委員長	北山陽子
まちづくり新幹線課参事	寺島進一	教育長	鈴木祐司
税務課長	中森恵	学校教育課長	岡野喜美雄
町民課長	中里博也	社会教育課長	佐藤修
保健福祉課長	豊嶋慎一	選挙管理委員会書記長	本前武広
産業振興課長	中山裕幸	監査事務局長	岡部忠
産業振興課参事	中田信樹	農業委員会事務局長	中山裕幸
建設課長	神野隆之	農業委員会事務局次長	中田信樹
水道ガス課長	佐藤剛		

### ◎本会議に職務のため出席した者の職氏名

議会事務局長	岡部忠
議事係長	増田理恵
議事係	岡田幸

---

◎議事日程

日程第1

一般質問

---

---

◎開議宣告

---

10時00分 開会

○議長（辻義雄） ただ今の出席議員は10名であります。  
定足数に達しておりますので、これより本日の会議を開きます。

---

◎一般質問

---

○議長（辻義雄） 本日の議事日程は、あらかじめお手元に配付したとおりであります。  
日程第1、一般質問を行います。質問通告書はあらかじめ配付しておりますが、質問者は4名、  
質問件数は4件となっております。

この際申し上げます。一般質問の質問時間は各議員40分以内と決定しております。質問時間の  
終了3分前と終了時にブザーを鳴らしますので、あらかじめご承知おきください。それでは順次質  
問を許します。

長崎議員。

〔議員（2番 長崎厚）登壇〕

○議員（2番 長崎厚） 私は1問について質問させていただきます。

1問目。自治体が養成する防災士を。長万部町では全町規模で防災訓練が行われており、危機管  
理に対し強い認識があると思っています。また、避難所に退避時には「もれなく」救助することが  
求められます。多くの自治体では地域防災向上に取り組まれており、正しい認識を持ったリーダー  
が必要となります。各地域に防災士を養成することで、災害発生時にはもちろん、訓練を通じて地  
域防災力が向上します。公民館や学校施設など町内で防災講演、指導により効率よく防災士の養成  
が可能になります。当町においても検討してはどうか。町長にお伺いいたします。

〔議員（2番 長崎厚）自席へ〕

○議長（辻義雄） 木幡町長。

〔町長（木幡正志）登壇〕

○町長（木幡正志） 自治体が養成する防災士を、お答えをさせていただきます。

防災士は、減災と防災力向上のための十分な意識・知識・技能を有する者として、NPO法人日  
本防災士機構が認証する民間資格で、道外では学校法人や民間法人のほか自治体が養成事業を行う  
ケースも見受けられております。

一方で、道内においては、防災の基本とされる「自助」「共助」「公助」の適切な役割分担を推  
進するため、北海道が事業主体となって「北海道地域防災マスター」の育成に取り組んでいるとこ  
ろであります。北海道地域防災マスターは、ボランティアによる地域の防災活動のほか、災害時  
には地域の防災リーダーとして活躍していただくもので、官公庁の職員やOBをはじめ自主防災組織  
や町内会の役員など、地域で防災活動に積極的に取り組んでいる方々を認定対象とするものであり  
ます。認定研修会は、道内各地を会場として年4回ほど開催され、参加費用の負担もないことから、  
積極的な制度活用により地域の防災力向上を図るとともに、防災士についても資格取得に向けた気  
運づくりに努めてまいりたいと考えております。以上です。

〔町長（木幡正志）自席へ〕

○議長（辻義雄） 長崎議員。

○議員（2番 長崎厚） 長万部町でもこの講演を行ってはどうか。北海道では年4回ほど開催されているわけですが、このNPO法人日本防災士機構、これは確かに歴史もそんなに長くはないんですが、平成16年の初めての認定資格が得られたのは1,581名、1,600ほどで始まった認定が開始されたと聞いております。現在では、16万5,000人ほどに増えて、この防災士の必要性を現在に知らしめているものと思われま。

長万部町でも確かに消防士の方、また職員の方もされていると思うんですが、認定を取っていらっしゃると思うんですが、講習会のような、そういう資格ではなくて講習会のようなものを各公民館とかそういう所で町民に対して開催されては、そういうことはできないものか。町長にお伺いしたいと思います。

○議長（辻義雄） 木幡町長。

○町長（木幡正志） 大変すばらしい提案だなと思っております。私も町民の生命、財産を守るといふひとつの基本信念を持って町政運営にあたらせていただいている関係上、貴重なご意見だと思っております。

現在、長万部に防災士は3名在籍をしております、防災マスターは8人登録されておるんですが、これはみんなそれぞれの任意によって資格を取得しているという方々で。決して公益の中で養成をしたという人ではなく、自らがその勉強をしながら防災士の資格を取られた。防災マスターの資格も取られてる。さすがにこういった方々がおられるということは、今後、防災士の方も3名おられるわけですから、例えば今おっしゃるとおり地域会館、各町内会の自主防災組織を立ち上げる段階での講習、講演に力を貸していただければいいなど、そんなことを考えております。

○議長（辻義雄） 以上で長崎議員の質問を終わります。

柏倉議員。

〔議員（9番 柏倉恵里子）登壇〕

○議員（9番 柏倉恵里子） 私は1点質問いたします。

認知症サポーターの育成を。長万部町で、一人暮らしの元気な方が認知症になった場合、今の使える全てのサービスを使っても、お一人の方を守れない状況がうまれております。例えば、認知症と診断されるまでの期間、認知症と判断され介護認定がおりるまでの期間、介護認定がおりてからサービスが開始され、施設入所までの期間、おおよそ1年かかります。この間、実に様々な事が起きておまして、大事に至っていないので良かったのですが、身内がそばにいないので、身内のようによりそう方の存在が必要です。私の経験からすると一人の方に三人のサポーターが必要です。しかもできるだけ近くに住んでいることが望ましい。

認知症サポーターキャラバンのホームページでは、平成28年12月31日現在で長万部町には180人のサポーターがいることになっております。活動状況が見えませんが、紹介されたこともありません。組織として立ち上がってなければ早急に立ち上げを。

また、活動出来るサポーターが必要です。毎年、育成者を増やせるような取り組みが必要と思っております。これが出来れば地域包括ケアシステムへの移行もスムーズにできると思っております。町長の所信を伺います。

〔議員（9番 柏倉恵里子）自席へ〕

○議長（辻義雄） 木幡町長。

〔町長（木幡正志）登壇〕

○町長（木幡正志） 認知症サポーターの育成を、お答えをいたします。

少子高齢化が進み、本町においても独居高齢者や認知症高齢者が増加傾向にあります。住民参加による地域づくりを通じ、地域住民の社会的孤立を防ぎ、認知症になっても可能な限り住み慣れた地域で暮らし続けられるよう、高齢者の生活全般を支える仕組みづくりが必要であると考えております。その基礎づくりとして、認知症について正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対して温かい目で見守る、さらには近隣の認知症の人や家族に対して、自分なりにできる簡単なことから実践していただけるような認知症サポーターを多く育成するため、サポーター養成講座などの取り組みに力を注いでまいりたいと考えております。また、その中から地域を担う組織作りやボランティア活動が進んで行くことをご期待したいなと思っております。以上です。

〔町長（木幡正志）自席へ〕

○議長（辻義雄） 柏倉議員。

○議員（9番 柏倉恵里子） 大変前向きなご答弁をいただきました。ありがとうございます。

現在、長万部町で施設入所ではなく在宅で認知症との診断をされてる方というのは何名くらいいらっしゃるようですか。

○議長（辻義雄） 木幡町長。

○町長（木幡正志） 2月現在で調べさせていただきましたけども、65歳以上介護認定者が497名。うち認知症の症状のある方は234名。以上です。

○議長（辻義雄） 柏倉議員。

○議員（9番 柏倉恵里子） 私もたまたまなんですけども、身内が遠くにいらっちゃって、独居の方を次々とお世話をすることになりました。特にやっぱり理解得られないのが、お身内の方なんですよね。いくら医師から、もう一人暮らしは無理ですよ、って言われていることを身内の方に伝えたとしても、身内の方というのは本当にすぐ動いてくれなくて。最初、やはり遠くにいるものですからお電話をかけるんですよ。そうすると、親というのは子供からの電話には心配をかけまいとして「いやいや全然心配ないよ。元気にいるんだよ。」って、「あなたたちこそ気をつけなさい。」とか言って。そうすると電話を受けた側は、全然いつもと同じじゃないか、これなら心配ないってことで、まだまだ一人でそこで暮らせるという判断をしてしまうんですね。たまに駆けつけてくれたとしても、ほんとに1時間か2時間滞在して一緒にいたんでは、全く普段と同じ状況しかわからないんです。だから1泊2泊一緒に過ごしていただかないと、いつもと違う、これは大変だっていうことにならない状況なんです。この期間がとてつもなく長くなる。サービスが始まって、全部のサービスを使う。例えば月水金の配食サービス、そして空いてる日にち、配食が来ない日にヘルパーさんを使う。週に1回。そして他の空いてる日にデイサービスを使う。食事の部分は何とかこれでカバーできるとしても、投薬の部分が非常に困難です。ということは、お薬カレンダーがもう今日が何月何日もわからないので、何曜日か朝か昼か夜かの判断も出来ない状況になるものですから。お薬が、飲まなきゃいけないという自分の判断ができないんです。やはり命に関わるものですから、薬の飲み間違いは。なので、私は朝も晩もその方のお家に1回ずつお届けに行くようなことをしていました。でもそれは地域包括は知ってても、例えばその近くにサポーターがいますよ、サポーターの力借りませんかという、そんなお誘いは一言もありませんでした。それで認知症の、180人の数を見て私はびっくりしました。どこにこんなに、いつの間にといい感じなんですけど。確かに、厚生労働省のホームページ見たんですけど、認知症サポーターに期待されることの1番2番は、多分この180人の方は心得ていることなんだと思います。3番目に挙げられているのが、

自分ができることを簡単なことから取り組む、みたいなことは書いてあるんですけど。その、実際に取り組むところが実は出来ていない状況だし、そのサポーターの人を束ねる機関が何もないってことが、やっぱり町にとって残念なところなんですよ。そこがやはり急務だと思いますし。町長のおっしゃるように、私も、民間の方が「私がやります」と言ってくださるのが1番いいと思うんです。そこにやる気のある人が集まってくるような形を取れるなら、それが最高だと思います。例えばサポーターを要請したら来てくれても、その人にお金を払うっていうようなことには、私はならないと思うんです。ということは、そうするとまた利用者さんはお金を払わなきゃならない。負担が生じてしまうので、あくまでもボランティアでこの役目を担ってくれる方というのが、私はこの町に必要だと思います。特にお一人暮らしの方は。私がたまたま携わった方は元気なものですから、ほんとにどこにでも歩いて行ってしまわれる方なんですよ。その方々をやはり地域の方は、この人認知症だということを実は知らなきゃいけないと思うんです。隠しておくというよりも知っていただいて、その人がどこか歩いていたら「どこ行くの」って声をかけてもらうとか、そういうこともほんとに必要ななって思うんです。今までほんとに大事に至ってないんですけど、私がたまたま2人立て続けにそうなったから思うのかもしれないんですけど、なんかあってからでは遅いなというふうに思うんです。やっぱりこの組織を立ち上げるにしても、たくさんの方に養成講座を受けていただかないと。私はいいです、知識を得ただけでもいいです、という人もたくさんいると思いますし、知識を得たいという人ももちろんいると思うんですけども。とにかくたくさんたくさん講座を開いていただいて、たくさん認知症を理解する人がいて、その中から「いいよ」と、もう一段進んで「私も協力するよ」という人が現れてくるまでちょっと時間かかると思うんですけど。それを強力的にバックアップするような形を取っていただければと思うんですけど。やっていただけるようすけども、どのような形で開催を考えていますか。

○議長（辻義雄） 木幡町長。

○町長（木幡正志） 今のお話はそのとおりだと思っております。長万部のサポーター180名、その内容見たら5回の養成講座を出て180人なんですよ。だから決してないわけではないんですけども。ただ、一番難しいのは認知症の当事者、家族がSOSを出さないということなんです。今おっしゃったとおりなんです。SOSを出してくれることによって、サポーターも地域の人方も行動が開始出来る。プライバシーを守りたい、自分のプライドを守りたい、これではサポーターが入り込めないですよ。それともう一つは、サポーターがサポートするためには、大事なのは家族がそれをきちんと認知をする。そうしないと認知症の方々、失礼ですけども、間違っって誤解から一つの大きな事に発展していく。そしたらサポートだってやりきれないんです。そうではなくて、そういうことが起きて、家族としてちゃんとサポーターの意思を守ってあげる。こういう形にならないと、どうしても、180人の人方が登録しても、決して活動の方向には繋がっていかない。だから基本的には、認知症の人が助けてくださいって、家族が「家のじいちゃんがばあちゃんが道路歩いてたら声をかけてください。実は認知なんです。」っていうことを自らが表現してSOSを出してもらうことが最初の第一歩。そう思って捉えてるんですけども。サポーターにならないということじゃなくて、その人方については、言ったとおり、有償で1時間800円で面倒見ますよとか、そういう話じゃないんですよ。だから家事の合間、仕事の合間で頼まれたらお手伝いするよ。一番大事なものは、散歩に連れて行ってくださいということなんです。要するに、外に出してだめよって話じゃなくて、外へ出して散歩してあげる、これが基本なんです。だからそこをどうやって家族も理解をして、そしてサポーターさんをお願いをするか。最初のSOSが一番大事だということ

は我々も、これから行政としてそういったマニュアルを出しながら、ぜひとも先ほど言ったとおり、230名を超える人方がいらっしゃるということを実際に我々が捉えて、そして、その人方にもそういったSOSの出し方、そしてプライドじゃなくて現実を見極めて、やっぱり相談してもらおうということが第一なので。そこから、サポーターの組織を立ち上げる前に、ワンステップはそこからだなんて考えてるんで。まずこの数字、今報告したとおり、じっくり捉えて、そうした問題を考えていかなきゃいけないなと考えておりますので、そうしたことを理解をしていただけるかと思っております。

○議長（辻義雄） 柏倉議員。

○議員（9番 柏倉恵里子） 大変重い答弁だなんて思っております。講座はやっていただけるということですし。ただひとつ、認知症の発見される、この人ちょっといつもと違う、変だなんていうことを見極めれるのが、結構、金融機関とかコンビニとかのお支払い。これが今まで出来たことが出来なくなるというのがコンビニとかで結構、あと金融機関で振り込みが出来ない、お金をおろせない、そういうことで助けをいただいて、多分、地域包括にも何名かは、郵便局で困ってますとか銀行で困ってますという連絡はいただいているはずなんです。だけれどもコンビニとかでは、例えば「この人何回も同じもの払ったのに払いに来るね」とか、あるいはとにかく小銭を出したがるんだそうです。紙幣で払っておつりをもらう。間違いたくないから。だけれど何十何円まで払っていた人がそういう行動に出ると、ちょっと変だなんていうところを感じれるのがそういう機関なんですよね。その時に「あれもしかして」ということでちょっと一報を入れていただく。この人ちょっと気をつけた方がいいんじゃないかしら、っていう一報を入れていただいて、地域包括が尋ねてみるとか、そんな形の連携というのは取れてますでしょうか。

○議長（辻義雄） 木幡町長。

○町長（木幡正志） 色んな関係機関にもお話をさせていただいているようなので、それらの連携については、地域包括の方にもお話があるかと思っております。ただ非常に難しいところは、例えばコンビニ行って事件を起こすわけでもなし、支払いの計算を間違ってくるくらいのことであれば、たいがい長生きされてくるとそういった症状も出てくるだろうなど。認知症の烙印っていうのは、お医者さんの判定でなければ、我々が「あなた認知症よ」ということは押せないですよね。そこがやっぱり扱い方の微妙なところで。やっぱり物を扱うんでなくて人の心を扱うってことなんです。人の心を。この心の温かさがなければ面倒みてやれないですよ。そういうことも含めて。今おっしゃったとおり、認知症の方々が発生するとすれば、例えばコンビニ、銀行、郵便局、こうした所をお願いをし、発見して、間違いないな、この人がこういうことが起きたんですよってことがあれば、これからの連携のなかでお願いしていかざるをえないな、そんな感じもしております。

○議長（辻義雄） 柏倉議員。

○議員（9番 柏倉恵里子） 全くそのとおりだと思います。まず認知症の診断をいただくと、必ず投薬が始まるんですよね。その認知症の診断に至るまでが、おかしいなと思いつながら何回も何回もそのおかしいことが積み重ならないと「あっ」というふうにはならないですよね。たった一度だけではならないので。でもお店屋さんの方でも「この人」と思いつて、また同じ件で来たなんてことは当然わかってても、そのまま「今回は何も支払いがないよ」として帰してあげてるそうなんです。だけれども発見が早いことで、認知症の症状を遅らせる薬というのが出るんですよ、認知症の診断に行くと。それを早く飲み始めることも大切なことなんです。また、その薬が少しずつ量が増えていくものなので、きちんと飲ませなきゃいけないっていうものもあって。それはやっぱり今まで全然薬



を飲んでなかった元気な人でも、認知症って診断されたら投薬が始まるっていうこともあるので。やはり投薬に関しては、今まで長万部町のサポートだけではちょっとまかないきれないところで。新しく、今まで携わっていない人が「認知症サポーターです」って言って、例えば入って行って、その人が受け入れるかという問題もある。本当に微妙なところで、非常に難しい人の心です、本当に。だけどサポーター側も、やっぱり心を尽くさなきゃないですし、そういう難しい面はありますけど、とにかくこれだけの認知症さんが今いらっしゃるということはわかりましたので、なるべくたくさん養成講座を開いていただいて、正しく理解していただいて、優しい心を持って接していただけるような、そういうことを多くの人が学ぶことが大事だと思いますので、ぜひしっかり開催していただきたいと思いますけども。要望で終わるわけにはいきませんので、もう一度決意をお願いします。

○議長（辻義雄） 木幡町長。

○町長（木幡正志） この議論を通じて、大変な問題、それから大きな過渡期にある心と心の問題、それから認知症という認定の仕方の問題、それからやっぱり家族がプライドを外してSOSを出す、出せる勇気を持つということも大事だし、今いる180名のサポーターの人方をどう表面に出て活動、活躍してもらおうかっていうのは、受け手の側の理解なんで、サポーター講座を開催して、サポーターを増やしていくということについては、これは将来的にもやぶさかでない。高齢者社会を迎えた我々の町の大きなひとつの事業、大きな形になるんだろうなと思うんだけども。サポーターが活躍出来るシステムの開発っていうか、そういうものをやっぱり、それらをきちんと筋立ててやっていながら、そして完成型にもって行って、これでサポーターの人方が十分に活動できるように、そこまで安心させるような形をとっていかないと、サポーターさんの活動、活躍というのは大変なことだなと思って認識しておりますので、そうしたことも含めて、検討課題にさせていただきたいと思います。

○議長（辻義雄） 以上で柏倉議員の質問を終わります。

大谷議員。

〔議員（6番 大谷敏弥）登壇〕

○議員（6番 大谷敏弥） 私は1問3点について質問いたします。

これまでの質問の進捗状況と対応は。これまでの質問について、1 少子化対策・子育て支援策は。答弁、長万部町の身の丈に合った子育て支援を実施して行きたい。2 人口減少対策としての移住定住促進・企業誘致の具体的な取り組み。答弁、1人でも多く長万部町に来ていただけるよう企業誘致と雇用の拡大に取り組む。3 各集会所に「手すり」の設置を。答弁、要望を聞きながら検討する。

以上3点について、進捗状況と対応は。町長の所見を伺います。以上です。

〔議員（6番 大谷敏弥）自席へ〕

○議長（辻義雄） 木幡町長。

〔町長（木幡正志）登壇〕

○町長（木幡正志） これまでの質問の進捗状況と対応はということでございますので、答弁をさせていただきます。まず第1点、少子化対策・子育て支援策については、平成28年度から妊産婦健診通院費の一部補助を実施し、また、町立保育所の第2子以降の保育料を無料といたしました。

さらに平成29年度においては、第2子以降の保育料等を民間の保育園、幼稚園にも対象を拡大し実施したいと考えております。

2点目のうち、移住・定住促進につきましては、現在の地域おこし協力隊3名に加え、搾乳などを行う農業支援員1名を新たに募集し、将来の新規就農につながるよう、様々な形で支援してまい

りたいと考えております。さらに、町外の方へ求人情報を提供する有効な手段として、町ホームページにおけるバナー広告の掲載を開始したほか、町内の空き家情報を掲載した、おしゃまんべ家さがしウェブを随時更新するなどの環境づくりに努めているところであります。引き続き、移住者に対する建築住宅の補助のあり方について検討を行うなど、移住定住促進に向けた取り組みを着実に進めております。また、企業誘致につきましては、母豚を千頭規模で一貫生産する長万部ちらい農場が、平成30年春の完成を目指して建設が進められているほか、豊津地区にトンネル工場の現場宿舎が建設されるとともに、今年6月には鉄道・運輸機構の鉄道建設所や寮が完成する予定であるなど、これまでの取り組みが徐々に実を結びつつあります。こうした中、来年度には新幹線駅の高架形式への変更認可が見込まれており、今後、さらなる新幹線工事関連企業の進出が期待されることから、長万部町企業等立地促進条例に基づく補助制度についての情報発信を強化するなど、企業誘致と雇用の拡大に向けて積極的に取り組んでまいります。

3点目の「各集会所に手すりの設置を」についてですが、町内会から要望のありました南栄町老人憩の家は昨年5月に設置し、陣屋生活館については、3月中に設置を予定しております。また、来年度においても、状況に応じて対応してまいりたいと考えております。以上です。

〔町長（木幡正志）自席へ〕

○議長（辻義雄） 大谷議員。

○議員（6番 大谷敏弥） 大変な前向きな答弁ありがとうございます。

1点につきましては、答弁とおりに実施をしてほしいと願います。

それでは2点目の再質問させていただきます。町外の方へ求人情報を提供する有効な手段を町ホームページにおけるバナー広告、町内の空き家情報、長万部町家さがしウェブなど掲げていますが、現在まで何件くらいの問い合わせがありましたか。

○議長（辻義雄） 加藤まちづくり新幹線課長。

○まちづくり新幹線課長（加藤慶一） ただいまのご質問にお答えいたします。空き家等のお問い合わせにつきまして9件ございました。以上です。

○議長（辻義雄） 大谷議員。

○議員（6番 大谷敏弥） 移住定住につながりましたか。

○議長（辻義雄） 加藤まちづくり新幹線課長。

○まちづくり新幹線課長（加藤慶一） このうち1件が移住ということでされております。

○議長（辻義雄） 大谷議員。

○議員（6番 大谷敏弥） 1件とありましたが、町にも人を呼び込む、そういう点で町長まずは一歩前に進める意味で、1戸だけでも町が買い上げて内装を改装し、移住定住促進に向けた取り組みとして。

〔通告外の声あり〕

○議長（辻義雄） 休憩します。

10時33分 休憩

10時34分 再開

休憩前に引き続き会議を開きます。

○議長（辻義雄） 大谷議員。

○議員（6番 大谷敏弥） まず一歩前に進めるという意味で、対応ですから、1戸だけでも町が買い上げて内装を改装し、移住定住促進に向けた取り組みとして、長万部移住生活体験の制定をし

てはいかがでしょうか。

○議長（辻義雄） 暫時休憩します。

10時35分 休憩

10時58分 再開

○議長（辻義雄） 休憩前に引き続き会議を開きます。

先ほど大谷議員からの質問の中で、町長より通告外ではないかという質問がございましたけれども、ただいま議運の委員会を開きました。それで本会議に戻したいと思いますので、引き続き一般質問をお願いいたします。

木幡町長。

○町長（木幡正志） 大谷さんの再質問にあたって、大変長い時間休憩をさせていただきましたこと、また議運を開会をしてひとつの方向を見いだしていただきましたことについては、感謝を申し上げます。

しかし先ほどの質問の内容ですが、私の答弁しっかり見ていただきたいと思います。その中で、1枚目の下から3行目、引き続き移住者に対する建築住宅の補助のあり方について検討を行うなど移住定住促進に向けた取り組みを着実に進めてまいります。こう答弁している。その答弁はきちんと理解をしてほしいと思います。

○議長（辻義雄） 大谷議員。

○議員（6番 大谷敏弥） 大変混乱を招きました。

次に、企業誘致については今後の動向を注視したいと思います。

それでは3点目に移ります。先月、高齢者芸能祭に参加したおり、参加の町民で足腰の弱い町民4～5人から福祉会館にも手すりがあればとの意見を聞き、足腰の弱い人でも参加していることに気づきました。手すりがあればもっと多くの町民も参加すると思います。福祉センターの手すりの設置について、町長いかがですか。

○議長（辻義雄） 大谷議員、答弁書の最後に2行にわたって書いてありますけど。

休憩します。

11時01分 休憩

11時03分 再開

休憩前に引き続き会議を開きます。

大谷議員。

○議員（6番 大谷敏弥） 只今の手すりの件について、質問を取り下げます。以上で終わります。

○議長（辻義雄） 以上で大谷議員の質問を終わります。

高森議員。

〔議員（4番 高森功治）登壇〕

○議員（4番 高森功治） 私の質問は1点です。

長万部高等学校の将来像は、先般、平成29年度公立高等学校の願書の出願状況が新聞報道され、長万部高校の出願は17名となっております。この春の長万部中学校の卒業予定者は38名と聞いておりますが、このうち長万部中学校からの出願者数をお聞きします。

長万部高校は、平成28年度にキャンパス校の指定を受けましたが、キャンパス校にもなっても何ら変わるものではないと教育委員会の説明もありました。長万部高校は多くの卒業生を排出してきた町の誇りでもあり、町内唯一の高校でもあります。長万部高校の意義は、長万部や黒松内のこ

れからの地域づくりの主角を担う人づくりの根幹でもあります。まして長万部には東京理科大学の校舎もあり、理科大の特別推薦枠までいただいておりますので、将来が心配です。

長万部中学校の生徒の出願の傾向と現実について、また、長万部高校の閉校の危機はないのか、長万部高校の将来像をどの様に捉えているのか教育長の所見を伺います。以上です。

〔議員（４番 高森功治）自席へ〕

○議長（辻義雄） 鈴木教育長。

〔教育長（鈴木祐司）登壇〕

○教育長（鈴木祐司） 長万部高等学校の将来像は、のご質問にお答え申し上げます。

長万部高校の最終出願状況につきましては、新聞発表のとおり１７名であり３月７日には全員が受験しております。ご質問にありました、長万部中学校からの出願者数につきましては１２名となっております。

長万部中学校の生徒の出願の傾向と現実についてですが、昨年度は長万部中学校４０名中２１名、５２％の生徒が長万部高校に進学しました。今年度については３８名中１２名、３１％の生徒が長万部高校を受験しております。平成１８年度以降の結果を見ましても、これまで５０％を割り込んだ年度はなく、教育委員会としましても大変危惧しているところであります。

今年度の傾向としては、自宅から通学できる近隣市町への進学を希望している生徒が１５名おり、希望する理由は、部活動や広い人間関係を求めている傾向にあります。また、近隣の学校のほとんどが定員割れになっており、全員入学できる状況にもあります。

長万部高校の閉校の危機はないかについてですが、議員からのご質問にあったとおり、長万部高校は平成２８年度から地域キャンパス校となっております。地域キャンパス校は、北海道教育委員会が平成２０年度から導入している制度であり、他の学校への通学が困難な地域を抱え、かつ地元からの進学率が高い第１学年１学級の高校を地域キャンパス校とし、センター校からの出張授業や通信機器を活用した教育活動への支援により、教育環境の充実を図るものであります。全道的な状況を見ますと、平成２７年度当初の段階で、当時１９校の地域キャンパス校のうち５校が再編基準の２０名を割っている状況もあり、北海道教育委員会は平成１８年に策定した「新たな高校教育に関する指針」の検証・検討を行っているところであり、当面、２７年度・２８年度は検証期間とされており、この間の募集停止等の措置はありません。

長万部高校の将来像をどの様にとらえているかについてですが、北海道町村教育委員会連合会をはじめ多くの団体から、再編基準の２０名から１０名への見直しを求めておりますが、現在、長万部高校ＰＴＡ・同窓会の方から、「長万部高校の教育を地域とともに考える会（仮称）」設立の動きがあり、長万部高校の魅力ある学校づくりを町教育委員会として全面的に支援・推進していかねばならないと考えております。

当面、ここ３年間は長万部町と黒松内町の中学校３年生は６０人台で推移しますが、その後５０人台４０人台となる年度もあることから、小中学生に長万部高校の魅力を感じさせ、長万部高校に進学したいと思うような取り組みを強化して行きたいと思っております。以上です。

〔教育長（鈴木祐司）自席へ〕

○議長（辻義雄） 高森議員。

○議員（４番 高森功治） それでは何点か再質問させていただきます。

長万部高校への出願が１７名ということですが、１２名が長万部中学校とのことですが、残りの５名というのは全て黒松内から出願されているということでしょうか。

○議長（辻義雄） 鈴木教育長。

○教育長（鈴木祐司） お答えします。長万部中学校以外の5名についてですが、黒松内町から4名、外1名と聞いています。

○議長（辻義雄） 高森議員。

○議員（4番 高森功治） 今年度の傾向として、自宅から通うことができる近隣市町村への高校へ出願している生徒が15名もいるとのことですが、学校別にはそれぞれどのようなようになっていますか。

○議長（辻義雄） 鈴木教育長。

○教育長（鈴木祐司） お答えします。個人情報もあるものですから、詳しく学校を何名と述べることは差し控えさせていただきます。市町村別でお話しますと、伊達市方面の学校に6名、八雲町方面の学校には5名、せたな町方面の学校には3名、室蘭市方面の学校には1名出願していると聞いています。

○議長（辻義雄） 高森議員。

○議員（4番 高森功治） 今年は例年になく近隣の市町へ生徒が流れているということですが、平成28年度から長万部高校はキャンパス校になりました。そのイメージ、マイナスイメージですけども、そのマイナスイメージから長万部高校を敬遠したということはないでしょうか。お聞きします。

○議長（辻義雄） 鈴木教育長。

○教育長（鈴木祐司） お答えします。実は、教育委員会としましても大変それは気になっていたところでありました。最終出願が終わった時点で、私が中学校の方にお邪魔しまして、校長、教頭、そして3年生の担任と面談をさせていただきました。聞き取りです。その結果、三者懇談で生徒さんの進路はほぼ決まるわけですけども、これは11月の下旬から12月の中旬にかけて実施されております。この1年間、キャンパス校に指定されてから地域の方では色々話題があったかなと思うんですけども、その間、学校のPTAの会合だとかあるいは授業参観で保護者の方が来た時、こういうなかで長万部高校がキャンパス校になったから、というようなことでの話題はほとんど聞いていません。三者懇のなかでは、長万部高校が地域キャンパス校になったから長万部高校に出願しないっていう話は、管理職も学担も中学3年生の担任も聞いてはおりませんでした。新しい人間関係で高校生活を過ごしていきたい、過ごさせたい。あるいは人数の多い中で自分を発揮したい、という生徒さんの希望。あるいは全道大会を目指している部活を志望しているお子さんについては、その部活を続けていきたい、活躍していきたい。そういう声があったように聞いています。なお、生徒が長万部高校か近隣市町の学校か迷うなかで、例えば子供に新しい事に挑戦してほしいと願う親御さんがいたり、あるいはお子さんの適正を考えて、地元の方で過ごしてみてもどうかという声もあったように聞いていますし、進路選択については、生徒さんはもちろん保護者の方もかなり悩まれて、そして真剣に家庭内あるいは学校も含めて相談されて、良い方向を決められていたのかなと思っています。あくまでも地域キャンパス校のマイナスイメージというよりは、先ほど申し上げた部活動とか広い人間関係、これがその理由かと考えています。

○議長（辻義雄） 高森議員。

○議員（4番 高森功治） 町民の皆さんの中には、地域キャンパス校になるということが今後の再編そして廃校ということにつながっていくと思っている人が少なからずいるように聞いているんですけど。ただ、長万部高校は道立高校でございますので道教委の管轄でございます。なので長万

部町の、町の教育委員会としてもできることが限られてると思うんですけども。長万部高校の今の状況、現況ですね、そしてこれからの立ち位置というのはどうのようになっていくのか、教育委員会の考えをお聞きいたします。

○議長（辻義雄） 鈴木教育長。

○教育長（鈴木祐司） お答えします。議員がご指摘のとおり、道立高校ですから、統廃合も含めて再編については道教委の配置計画に沿って進んでいくと思います。この高校の配置計画につきましては、中学生の進路選択に十分な検討期間を要する、ということから毎年示されています。それは3年間の具体的な計画とその後の4年間の見通し。例えばこの地域には中3のお子さんが何人いてとか、そういうことと、各学校の間口等が示されている計画が適正配置計画のなかで示されています。例年ですと6月あるいは7月、2回ほど開かれて、各管内ごとに協議会が設けられ、そこで理解していただくような形をとっているところです。

先ほど申し上げた、平成18年度に「新たな高校教育に関する指針」に基づき、望ましい学校規模を維持するための高校の再編計画がずっと進んできておりました。特に長万部町のように地理的な条件で整備が困難であり、かつその時には長万部中学校から長万部高校には50%、60%の生徒さんが進んでいたものですから、そのような地域からの進学率の高い一学年一学級の、いわゆる一間口の学校を地域キャンパス校として、同一の通学区内、長万部ですと八雲がそこに入る、ですから八雲高校が、そのセンター校から出張授業やらあるいは通信を使った教育環境の整備を図っていたところでもあります。ところが地域キャンパス校に指定されない場合は、2か年連続して第1学年の40人という定員を割り込んだ場合、20人つまり50%を割り込んだ場合、それが2か年続いた場合、専門学科、例えば看護だとかそういうところは50%ではなくもっと低いんですけども、25%なんですけども、うちのように一間口で40人のある学校で20人を割って、そしてそれが2年間続いた場合に、先を見越してその後生徒の増加が見込まれない場合は、募集停止になっています。私どもの長万部高校はキャンパス校に指定されています。募集停止になるというのは地域キャンパス校に指定されない場合です。近隣の学校を見ますと、ここ10年では渡島管内では、恵山高校、戸井高校、木古内高校、近隣の管内では古平高校、仁木商業、豊浦高校、洞爺高校がこれに当たります。20人を2年続けて、そしてその後生徒の増加が見込まれない場合は、そういう形を取って募集停止をしています。地域キャンパス校だった熊石高校、町でも町教委主催で説明会を開かせていただきましたけれども、色んなお声がありました。これについては、当時21年度の第1学年が17名でした。次の年は11名でした。その先増加も見込めないということから、その時示されていた23年度の策定計画に基づいて、平成26年度に生徒の募集停止を決めたところです。

平成20年度から、先ほど申し上げた地域キャンパス校、それからセンター校の制度が始まり、19校が、長万部もキャンパス校になっていますが、道教委の考えとしては残していきたい、先ほど申し上げた地元の進学率、あるいは地域性を考えて残していきたい学校として、その充実を図ったのがこの地域キャンパス校だと考えています。

ところが27年当初、19校あった地域キャンパス校が、そのうち5校が20人を割りました。人口減少社会への対応策やあるいは地方創生の観点から、道教委の方では現在その地域キャンパス校の在り方あるいは教育環境の整備等も含めて、検討・検証を進めています。本年3月上旬まででは、新しい指針は今示されていません。道議会でも質問があったとは聞いております。その間、平成27年度6月の議会でも、委員の皆様によって、道教委、知事宛に「新たな学校づくりの見直しと地域、学校の実態に応じた実現の意見書」を出していただきましたし、先ほど申し上げた道の

町村の教育委員会連合会の方からも、そこは再編の基準の20名から10名に修正を求めているところ。先ほど申し上げたとおり、この2年間は検証期間という事なので、募集期間あるいは見直し等についてはありません。以上です。

○議長（辻義雄） 高森議員。

○議員（4番 高森功治） ただですね、今年度のように長万部中学校から30数%しか長万部高校を希望しないという状況が続けば、仮に新しい指針で20名から例えば15名となったとしても、近い将来、長万部高校が再編基準にかかる可能性というのは十分にあると思うんです。この再編基準にかからないために、教育委員会としては何か手立てを考えているのでしょうか。

○議長（辻義雄） 鈴木教育長。

○教育長（鈴木祐司） 先般、中学校に出向きまして。管理職あるいは先生方からのお声を聞くと、やはり子供自身が長万部高校を選択して行きたい、そういうふうにして強く思えることがひとつのキーポイントになろうかなと思っています。そのためには、まず色んな工夫を教育委員会として義務の学校にお願いをする。あるいは高校とも連絡を取り合いながら、融通をつけてもらうことが必要かなと思っています。

具体的に考えている事、進んでいる事も含めていくつかお話をさせていただきます。ひとつは今年度から高校の方ではオープンキャンパスを開いていただきました。10月下旬でした。これを次年度は、子供がまだ選択する以前に早く開く方向はどうか。中学校の校長とは、6月を目途にどうだろうかという話はしております。オープンキャンパスは、高校の方に出願を予定するお子さんが出向いたわけですが、中学校3年生は全部今年行ったわけですが、来年度は2年生も参加して、2年生3年生が全員参加する。そういう体制は取れないものかということで、今相談をしているところです。当然、教育課程授業の中身が変わるわけですので、新年度に間に合うように、中学校に具体をお願いしようと思っております。それから、中学校の方に長万部高校のありようがよく見えるような、ホールが丁度あるものですからそこを利用したり、長万部高校の紹介するコーナーを作っていただくという事も案として出ています。それから教職員の人事が、内示が出ている状況なんですけども、内示の段階で中学校の方には管理職も含めると英語の免許を有する教員が比較的多い。4名なんですけども。一間口の学校としては多くなったものですから、何とか教員を活用して、小学校も含めて乗り入れ、高校の方にはどのような形になるかわかりませんが、中学校の方から高校の方に支援するとか、そんな案も今話題となっています。これは高校の方で文科省の方の新たな授業を受けている状況なものですから、それをバックアップする形を取りながら、教員のやりとりなんかもしていきたいなと思っております。それから今年、小中高校生によるジョイントコンサートを2月に実施しました。今までは、中学生と小学生のジョイントコンサートをやっていたんですけども、熱心な高校の先生方もいらっしやいまして、高校の全面的な支援もありましたので、小学校3年生から高校生まで、吹奏楽の力量の差はあるんでしょうけども一緒に参加して、町民の参加も大変良かったと私は思っております。つまり、小学生から中学生、高校生まで揃って、同じような活動の体験を繰り返すことによって、自分の良き先輩を見る姿ということを目指して、取り組んでいく必要があるかなと思っております。これについては、今年スタートしたものですから、来年以降、町教委としてももっと積極的に関わっていく。例えば保護者の方に呼びかける。あるいは楽器の運搬等についても関わりたいなと思っております。それからふれあいオリンピック、実際に高校生が参加して1回しか実施していません。2年間は天候あるいは災害等で実施出来ないんですけど、これに比較的参加の少ない小学生、中学生が参加をして、高校生の活躍の場を見

ていく。そんなことを考えております。

一方、今後より以上、黒松内町からのお子さんを受け入れなければ学校の存続が危ぶまれる部分があるものですから、小中学生のうちから長万部町あるいは長万部高校を意識した、そんな事業も展開していきたいと思っています。具体的には、今年、町教委で実施している「わくわく体験塾」という理科大学を会場に行う事業があるんですけども、これに黒松内町の方に呼びかけをしました。今年、5名の参加がありました。そして長万部町の子供達と一緒に活動をともにできた状況です。加えて黒松内町主催のブナの森の関連事業にも、私どもの町からお子さんが参加しております。小さいうちから慣れていただくというか、そんな工夫もしています。それから理科大学で、小学校、中学校で理科大実験教室といって体育館を借りたり、体育館で学生が参加した事業を展開しているものですから、それに黒松内町の方にもお声をかけるのもひとつの手かなと思っています。これについてはまだ具体はしていません。教育長同士では少し話題にしていたけども、そこに学校が下がるものですから日程がなかなか決まらなくて、ぎりぎりではなければならないものですから、なかなかすぐに決まっていけない状況であります。委員会同士では話題にしています。また、先ほど申し上げたジョイントコンサートに、例えば黒松内のお子さんを招くというのもひとつの方法かなと思っています。町教委としては、過去に今金町が主体となって、今金町に札幌の演奏者がみえて、長万部中学校、八雲中学校、それから2年目には瀬棚の方からも参加しましたが、そういった事業で、ひとつのエリアの中で展開している事業もあるものですから、そういった事も案としては持っているところであります。また、先ほど申し上げた「長万部高校の教育を地域とともに考える会」を、具体的な活動が進んだ時に、教育委員会が積極的に関わっていく姿勢も大事かなと思っています。

○議長（辻義雄） 高森議員。

○議員（4番 高森功治） たくさんの事業や活動を考えているようですが、一昨年行われた地方創生サミットでは、せっかく理科大があるわけですから高校を理数に特化した学科や英語に特化した学科、それから今需要が多い福祉や介護の学科にしたらどうかという意見、個人的な意見ですけども出ておりましたけども。学科転換ということは簡単に出来るのか出来ないのかというのを教育長にお聞きします。

○議長（辻義雄） 鈴木教育長。

○教育長（鈴木祐司） 地方創生サミットで個々にお話されている姿も私聞いておりましたし、それからその後のレセプションでもそんなお声が随分ありました。特に理科大の兼ね合いでの理数の関係、それから英語を特化したとかそういうことが随分そこでお話されてた方もいるように記憶しております。正式な場で、教育委員会の中で学科転換の話題で討議したことはありません。実際のところ自分の知る限りでは、道立高校のままで学科転換というのはかなり厳しいと思っています。実際のところ理数とか英語にしても、全道的に見ると、公立私立も含めて学科変更をして普通科に戻したり、あるいは間口を少なくする時にこういった学科が切られていったりという学校が全道的にいくつもあります。管内でいうと、私立、函館の白百合高校も英語科うんぬんで話題になった記憶があります。それから福祉とか介護については、見通しを持ったりだとか、あるいは実態を少し捉まえる必要もかなりあるでしょうし、また今年、奥尻高校が町立に移管したんですけども、町立に移管した場合の相応の費用とか、あるいは何の科目を何の領域をどう絞っていくかということについても、認可を受けるまで時間も要しますし、それから話題をどう束ねていくかということあたりも考えれば、学科転換につきましてはハードルは大変高いなという気がしています。また学科転



換をした場合、本町の子供達みんながその学科を希望するかどうかということも、大きなネックになると思います。本町の子供達が入りやすい、選択しやすいということを考えれば、私は今の普通科を持っている長万部高校を全面的に支援していく、そんな方法がいいのかなと思っています。

もうひとつ、まずは新しい指針が、今後、道の方から示されていくと思うんですけども、その指針で現在20人という、40人の一間口なんですけども、20人を割って2か年経って、その後の生徒が見込みがないということが、何人の基準になっていくのかということが私は非常に気にかかりますし、これを注意していかなければならないかなと思っています。間違いなく、先ほど申し上げたとおり長万部町と黒松内町のお子さんを合わせた数が、今は60名台ですけど、今の4年生の時には40人台になります。現在は合わせると48人です。そこはそこでまたうちの方は少し上がっていくんですけども。再編うんぬんについてはここ数年が正念場になると考えています。

学校と教育委員会が、魅力ある長万部高校づくりに、ほんとに子供達にも、それから保護者の方にもそれから地域の方にも浸透させていって、先ほど申し上げたとおり、子供自身がやっぱり行きたいなと願えるような学校づくりを支援できればなと考えております。以上です。

○議長（辻義雄） 高森議員。

○議員（4番 高森功治） 町長に聞きたいんですけども、総合教育会議は町長の権能のもとに教育行政に関与する立場でございますけども、この件に関してはどのようにお考えですか。

○議長（辻義雄） 木幡町長。

○町長（木幡正志） 今の教育長の答弁を聞いておりました。今まで議会の皆様方のご理解をいただいて、長万部の高校の存続のためにということで、通学費補助から始まって制服の貸与、そして去年から検討してきた奨学金の関係についても、この3月の議会で条例改正をさせていただいて、できるだけ存続へ向けて緩和をしながら、使いやすいそして進学しやすいという、ひとつの高等学校へ向けての所管を越えた関係で、議会の人方の協力もいただいてやってきたんですが。

実は12月に入って報告を受けた時は本当にびっくりした。12名という数には驚きの数だった。その後、新聞で刻々と願書の手続きか何かで新聞に出た時に、渡島管内で南茅部町の高校と並んで、一番最下位に落ちてしまった。そして先ほど、教育長の答弁にもあったとおり檜山管内、奥尻町は町営の高校として全国に学生を呼びかけて、それが見事当たったのかどうかかわからないけども、進学率の向上に努めてた。福島も長万部よりもずっと低かったんだけど、それをまた回復させたということで見ていくと、やっぱり我々の努力が足りなかったのかなと。長万部高校に進学していただくためには、やっぱり中学校の方に働きかける、PTAの方にも働きかけながらやらないとだめだったんでないのかなという気がして。

今回の12名の生徒31%という数字は、本当に中学校卒業する生徒が、長万部に魅力を感じたのかということを見ると、我々が今までやってきた通学費補助、制服の貸与、奨学金も枠を広げて、長万部高等学校を卒業した学生については奨学金制度を活用させてよと。これはひとつ言ってしまうと、黒松内から来た子供であっても、八雲から入学した子供であっても、大学進学に関して活用できるよというところまで緩和していったわけだから、やっぱりそこは町の努力として見てほしかったなと思うのと、やっぱり我々自身が今後、長万部高校の進学率を高めるというのは、先ほど言ったとおり、27年28年はないけども、29年度以降になったら、これがどうなってくるかわからない話になってきているんで、やっぱり大学、理科大の特別枠で2人推薦入学できるっていう、これがもう6、7年活用されてない。そこでやっぱり来年に向けて、理科大の進学枠があるよと。これは長万部の高校、長万部の中学校の生徒が高校行って使ってほしいっていう地元の願いが

あったんだけど、これやっぱり全面開示してもいいなと。その上で例えば、他の高校から1年生の時から下宿して3年間頑張ったと。そして理科大に行きたい子供が推薦枠がほしいって言ったら、やっぱりそこは供与してやってもいいなと。そのくらいやらないと、小さな殻に閉じこもっていたら全くだめだっていうことが今回ようやく分かってきたんでないのかなって思っております。

今喫緊の課題で、29年度からどうやって高等学校を存続させていくのに、議会も我々も努力させていただく。その中で教育委員会を中心としてこういった問題を捉えて、先ほど教育長が言ったとおり種々様々な問題点があったにせよ、ようやくPTAも動いてくれて、同窓会の人方も動いてくれて、魅力ある学校づくりをするという提言をしていきたいということなんで。やっぱりそこは長万部中学校のPTAの方々もご協力していただいて、魅力ある学校づくりに奔走していただければと思っております。それは今後、総合教育会議でも取り上げて、ぜひこうした課題を中心にしていかないと。長万部に東京理科大学があって、キャンパス校になって、閉校を迎えるなんて危機感を我々が共有して考えるということはずできない。そこを乗り越えていかないといけないということを我々が真剣になってこれから取り組んでいくのが大きな課題だと思ってるし。来年から60人いるのであれば、せめて3~40人は、長万部高校を目指すような施策をとっていく。これはひとつの大きな課題だと思っておりますので、ぜひ議会の皆様方にもご理解ご協力をいただきながら、長万部高校の存続にかけていきたいと思っております。

○議長（辻義雄） 以上で高森議員の質問を終わります。

以上をもって一般質問は通告通り全部終了いたしました。これで一般質問を終わります。

以上で本日の日程は全部終了いたしました。

お諮りいたします。予算審査特別委員会に付託された議案審査のため、15日と16日の2日間を休会したいと思います。これにご異議ございませんか。

〔「異議なし」の声あり〕

ご異議なしと認めます。

よって15日と16日の2日間を休会することに決定いたしました。

なお、本会議は3月17日午後1時30分から再開いたしますのでご承知おきください。

それでは本日はこれにて散会いたします。

どうもご苦勞様でした。

11時41分 散会

---